



Title	『失われた時を求めて』におけるコンブレーのトポグラフィー：「サン=ジャック通り」をめぐる
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 2002, 41, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12304">https://hdl.handle.net/11094/12304</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『失われた時を求めて』におけるコンブレーのトポグラフィー ——「サン=ジャック通り」をめぐる——

和田 章男

7巻から成るブルーストの小説の冒頭に置かれ、「コンブレー」と題された子供時代の物語には、主な作中人物たちの多くが姿を現すばかりでなく、のちに大きく展開される主要なテーマのほとんどが様々なエピソードや描写の中に萌芽的あるいは象徴的に表現されている。この部は«I»（「コンブレー I」）と«II»（「コンブレー II」）の二つのセクションから構成されており、前者においては、母の思い出が中心となるいわゆる「就寝劇」が語られるが、これは執拗に繰り返し蘇る回想でありながら、時間的・空間的に限定された部分的記憶である。他方、後者においては、プチット・マドレーヌを仲介とする無意識的記憶によって、コンブレーの全体が、そして子供時代の全体が蘇ることになる。その中心をなしているのは教会とレオニー叔母であるが、「コンブレー」という町の名がタイトルになっていることから、トポス（場）の問題は極めて重要である。本稿では、トポスの重要な構成要素の一つである街路に注目しつつ、とりわけレオニー叔母の家が面している「サン=ジャック通り」を中心に考察する。

「コンブレー II」の冒頭においてコンブレーの町の全体像が描写されるが<sup>1)</sup>、それは中世の城壁の遺跡に囲まれることによって「完璧な円形」をなし、その中心には教会がある。円という形からも、教会とそれを取り巻く家々を「羊飼」と「羊の群」に喩えていることから、コンブレーが保護され、統一された世界であることがわかる。このようにコンブレーはキリスト教的中世の典型的な町として表されているが、住むにはいささか陰鬱な町であるともいう。それは家の切り妻が街路に暗い影を作るせいでもあるが、他方では重々しい聖者の名を持つ通りの名にも起因している。

[...] des rues aux graves noms de saints ( desquels plusieurs se rattachaient à l'histoire des premiers seigneurs de Combray ) : rue Saint-Hilaire, rue Saint-Jacques où était la maison de ma tante, rue Sainte-Hildegarde, où donnait la grille, et rue du Saint-Esprit sur laquelle s'ouvrait la petite porte latérale de son jardin ; [...]  
(RTP, I, p.48)

1) *A la recherche du temps perdu* (以下 RTP と略す), «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989, p.47.

中世を喚起する街路の聖者名はコンブレーの初期の領主たちの歴史とも関連しており、このように町の空間に歴史的時間の軸が導入されているのだが、留意すべきことはコンブレーのもうひとつの中心となっているレオニー叔母の家がこれらの聖者の名を持つ街路に囲まれているということである。「サン＝チレール通り」、「サン＝ジャック通り」、「サント＝イルドガルド通り」、「サン＝テスプリ通り」という4つの聖者名を持つ街路がここに見られるが、これらのうち「サン＝チレール通り」と「サン＝テスプリ通り」はコンブレーのモデルであるイリエに実在する街路名である。現在「レオニー叔母の家」という名のもとにプルースト博物館になっているのは、作家の父であるアドリアン・プルーストの姉エリザベート・アミヨの家であり、プルースト一家が休暇を過ごしたのはこの家においてであった。その家が面しているのが「サン＝テスプリ通り」であったが、作家が生きていた間に既に父の名が冠せられ、「アドリアン・プルースト博士通り」という名になっている<sup>2)</sup>。フランスに貢献した著名な個人名が通りの名に付けられるのは近代の共和制のもとでのことであろうが、プルーストは中世的特徴を強調するために、実在の街路に加えて「サン＝ジャック通り」と「サント＝イルドガルド通り」という架空の街路をも創造したのであろう。

## I. 聖者名を持つ街路の生成過程

さて、聖者名を持つ街路に関して、その生成過程を調べる必要がある。自伝的色彩の濃い未完の小説『ジャン・サントゥイユ』においてもイリエの町の描写があり<sup>3)</sup>、のちのコンブレーの描写のもとになっていることは間違いがないが、そこでは現実通りに「サン＝チレール通り」と「サン＝テスプリ通り」のみが記されている。『失われた時を求めて』の草稿に目を向けるなら、コンブレーの町の描写が素描されるのは1909年春から夏に書かれたカイエ8においてである。

À l'habiter Combray était un peu triste comme ses rues aux graves noms de saints, rue Saint-Hilaire, rue Sainte-Hildegarde, rue du Saint-Esprit, que l'église dominait toutes sur sa «place» [...] (Cahier 8 ; RTP, I, p.703)

この草稿では、街路に付けられている聖者の重々しい名がコンブレーの町を暗くしているというのみである。ただし、この段階で「サント＝イルドガルド通り」という架空の街路が導入され、キリスト教的特徴がより強められるとともに、イリエの現実世界からコンブレーの想像世界への移行が認められよう。ところで、町の描写の後にレオニー叔母のことが語られるが、彼女の家の位置についてはな

2) *Correspondance de Marcel Proust*, XXI, p.611 : « En même temps vous serez bien gentil de me dire votre adresse exacte car je vous envoie cette lettre un peu au hasard ne sachant pas si vous demeurez toujours dans la rue du Saint-Esprit qui à ce que je croie porte aujourd'hui le nom de Papa. »

3) *Jean Santeuil* précédé de *Les Plaisirs et les jours*, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p.281.

にも触れられることはない。さて、1909 年秋に作成された「コンブレー」のタイプ原稿にわれわれの注意を引く重要な書き込みが見られる。タイプ原稿は 3 部作られたが、完全に残っているのは 2 部で、それぞれ「タイプ原稿 1」、「タイプ原稿 2」<sup>4)</sup>と呼ばれている。これらの原稿にコンブレーの描写の同じ箇所に関して多少異なる書き込みがなされている。

des saints dont plusieurs se rattachaient à l'histoire de Combray, que j'avais vu à la messe flamboyer dans les vitraux et de ses premiers seigneurs que je connaissais bien pour les avoir souvent regardés à la messe, chacun dans son vitrail, et dont les noms inscrits à l'angle des carrefours perpétuaient après tant de siècles, à la hauteur des stores des boutiques, leur résidence majestueuse, surnaturelle et pourprée. (タイプ原稿 1 における加筆; *RTP*, I, p.1124)

comme ses rues aux graves noms des saints, rue Saint-Hilaire, rue Saint-Jacques, où était la maison de ma tante, rue Saint-Hildegarde, où donnait la grille, et rue du Saint-Esprit sur laquelle s'ouvrait la petite porte latérale de son jardin ( des saints dont je connaissais plusieurs pour les avoir vus à l'église dans leurs vitraux, qui se rattachaient à l'histoire des premiers seigneurs de Combray, où leur nom inscrit à la croisée des rues semblait perpétuer leur résidence immémoriale et surnaturelle ). (タイプ原稿 2 における加筆; *RTP*, I, p.1124)

タイプ原稿 2 における加筆は決定稿と同様にレオニー叔母の家が聖者名を持つ街路と関連づけられており、こちらの方が後に書かれたものであることは確かである（この二つの書き込みの時期については後にも触れる）。タイプ原稿 1 の加筆において重要なのは、コンブレーの歴史という時間軸が導入され、空間に時間性が加えられたことであろう。決定稿ではさらに語り手の過去の記憶という個人的時間も導入されており<sup>5)</sup>、町の過去と個人の過去が平行して町の空間に深みを与えることになる。タイプ原稿 2 の加筆において、レオニー叔母の家が聖者名を持つ街路に囲まれるようになるが、これらの街路を見おろしているのは教会であることから、コンブレーの二つの中心である教会とレオニー叔母の家が街路を介して結びつくようになる。注目すべきことは、この段階ではじめて架空の「サン＝ジャック通り」が現れ、レオニー叔母の家が面する街路となったことである。

## Ⅱ. 「サン＝ジャック通り」の意味と機能

「サン＝ジャック通り」という名を見れば、イリエに実在するサン＝ジャック

4) 「タイプ原稿 1」および「タイプ原稿 2」のパリ国立図書館による整理番号はそれぞれ「N.A.F.16730」、「N.A.F.16733」である。

5) *RTP*, p.48 : «[...] ; et ces rues de Combray existent dans une partie de ma mémoire si reculée, peinte de couleurs si différentes de celles qui maintenant revêtent pour moi le monde, [...]»

教会を思い起こすことは容易である。しかしこの街路名は単に現実のレフェランスに対する暗示にすぎないのであろうか。ところで、小説の中ではコンブレーの教会は「サン＝チレール教会」とされている。コンブレーの司祭の語源の説明によると、「Hilaire」の変形の一つに「Illiers」があるという<sup>6)</sup>。作品中の教会名にはコンブレーのモデルであるイリエに対する暗示があると言うことはできるかも知れない<sup>7)</sup>。実のところ、イリエにはかつてサン＝チレール教会は実在したのであり、現在でもその遺跡が残っていることに留意しよう。プルーストは失われたものを小説の中で蘇らせようとしたのではないだろうか。さらに言えば、サン＝チレール教会の方が歴史のより古い層に属しており、伝說的でもあることもその理由と考えられる。コンブレーの教会は伝說的なメロヴィング朝時代にまで遡る時間的深みを持っているのである<sup>8)</sup>。興味深いことは、この教会に祭られている聖者イレールがステンドグラスに黄色いドレスを着た女性の姿で表されていることである<sup>9)</sup>。シャルリュス、アルベルチヌ、ヴァントウイユ嬢などの主要な作中人物たちの両性具有性、およびこれらの人物たちによって後に大きく展開されるソドムとゴモラのテーマが、作品全体の根幹となっている「コンブレー」において、さらにその中心をしめる教会の中に萌芽的にしるされているのである。

「サン＝ジャック通り」に話を戻そう。この街路に対する言及は作品全体の中でわずかに二度しかない。しかも「コンブレーⅡ」の冒頭部の同ページにおいてのみである。

(a) [...] rue Saint-Jacques où était la maison de ma tante, [...] (RTP, I, p.48)

(b) Son [=la tante Léonie] appartement particulier donnait sur la rue Saint-Jacques qui aboutissait beaucoup plus loin au Grand-Pré ( par opposition au Petit-Pré, verdoyant au milieu de la ville, entre trois rues), et qui, unie, grisâtre, avec les trois hautes marches de grès presque devant chaque porte, semblait comme un défilé pratiqué par un tailleur d'images gothiques à même la pierre où il eût sculpté une crèche ou un calvaire. (RTP, I, p.48)

(a)は先に引用した聖者名を持つ街路についての記述の一部であるが、レオニー叔母の家は「サン＝ジャック通り」、「サント＝イルドガルド通り」、「サン＝テスプリ通り」に囲まれている。そしてその正面は「サン＝ジャック通り」に向かっており、裏の庭にある小さな門は「サン＝テスプリ通り」に開いていることになっている。また他の箇所でも庭の門はやはり「サン＝テスプリ通り」に面してい

6) RTP, p.103 : «Hé bien! c'est saint Hilaire qu'on appelle aussi, vous le savez, dans certaines provinces saint Illiers, saint Hélier, et même, dans le Jura, saint Ylie.»

7) RTP, p.1149, (page 103, note 3)参照。

8) RTP, p.61 : «[...] ; et s'enfonçant avec sa crypte dans une nuit mérovingienne [...]»

9) RTP, p.103 : «Mais si, dans le coin du vitrail vous n'avez jamais remarqué une dame en robe jaune? Hé bien! c'est saint Hilaire [...]»

る—«dans ce petit coin du jardin qui s'ouvrait par une porte de service sur la rue du Saint-Esprit»(RTP, I, P.71) ところが、散歩の場面に目を向ければ、テキスト上の矛盾に気づく。メゼグリーズの方へ散歩に出かけるときには、「サン＝テスプリ通り」に面する大きな門から出かけるとされているのだ—«Quand on voulait aller du côté de Méséglise, on sortait [...] comme pour aller n'importe où, par la grande porte de la maison de ma tante sur la rue du Saint-Esprit.» (RTP, I, P.133) 他方、ゲルマントの方へ行くには庭の小さな門から出ることになっている—«On partait tout de suite après déjeuner par la petite porte du jardin»(RTP, I, p.163) つまり叔母の家の表側に「サン＝テスプリ通り」があるということだ<sup>10)</sup>。このことは散歩のエピソードの下書きが含まれているカイエ 12 においても同様であって、メゼグリーズの方へ行くには、表のサン＝テスプリ通りを下り、ゲルマントの方へは裏側から出る<sup>11)</sup>。少年時代の主人公にとって、二つの方角が対照的な別世界に思えるのだが、そこへ向かうために出る門が表と裏という対立を持っていることによってそのことがなおさら強調されることになる。このように「コンブレー II」の冒頭と散歩の場面では「サン＝テスプリ通り」の位置が異なっている。この矛盾はいかに説明すべきであろうか。レオニー叔母の家のモデルであるイリエのエリザベート・アミヨの家はサン＝テスプリ通りに面している。また『ジャン・サントウイユ』においても、主人公が滞在するイリエ（あるはエトウイユ）の祖父の家もまた同名の街路に向かって建っている<sup>12)</sup>。『失われた時を求めて』においても散歩のエピソードに関しては、草稿から決定稿に至るまで現実の街路の位置がそのまま踏襲されていると言える。上で見たように、タイプ原稿 2 の加筆の際に、「コンブレー II」の冒頭で「サン＝ジャック通り」を叔母の家の表通りに変更しながら、散歩の場面に修正を加えることを忘れたというしかないであろう。しかるにここで考察しなければならないのは、現実とは異なる「サン＝ジャック通りに面するレオニー叔母の家」の方である。

街路という細部に対しても、作家がいかにこだわりを持って描いていたかは、1910 年のはじめ頃に書かれたカイエ 29 の中の「サン＝テスプリ通り」についての下書きを見ればわかる。その断片にはまさしく«La Rue du Saint-Esprit」というタイトルがつけられているばかりでなく、実に多くの削除改変が施されている。削除部分を簡略して転写すると以下ようになる—«La Rue du Saint-Esprit / La rue

10) RTP, I, p.69 には次のような記述がある：«Et si Françoise s'amusait de l'air épouventé de ma tante quand de son lit elle avait aperçu dans la rue du Saint-Esprit une de ces personnes qui avait l'air de venir chez elle [...]» レオニー叔母の部屋はここでは明らかに「サン＝テスプリ通り」に面しており、「コンブレー II」冒頭の記述とは矛盾している。

11) «Pour aller du côté de Méséglise on sortait comme pour aller n'importe où [...], par la porte de la maison de ma tante, on descendait la rue du Saint-Esprit, [...]» (RTP, p.815) 他方、ゲルマントの方へ出かけるときには庭の裏門から出る：«On partait tout de suite après le déjeuner, par «derrière», par la porte du jardin [...]» 「裏から」という言葉が強調されていることも、メゼグリーズの方へ出かける「表側」との対立を明らかにしている。ただし、決定稿においては«petite porte latérale»と記されているように、通用門は家の側面にあるのかも知れない。

12) Jean Santeuil, p.281: «c'était rue du Saint-Esprit qu'on demeurait, [...]»

*du Saint-Esprit* <Saint-Hilaire> <unie> grisâtre et qui [...] avec les trois hautes marches de grès qui presque devant chaque porte, semblait comme un défilé *creusé* <taillé en escalier> par un sculpteur dans la pierre, pour un calvaire ou pour une crèche [...]» (イタリック体は削除部分、<> は加筆部分を示す) そしてほぼ同時期にこの素描をもとに「コンブレ」のタイプ原稿 1 に赤インクで次のような加筆がなされる。

Son appartement <particulier> donnait sur la rue *St Hilaire* <du Saint-Esprit> qui aboutissait beaucoup plus loin au “Grand Pré” ( par opposition au “Petit Pré” *fort grand d'ailleurs qui était* <situé> au milieu de la ville entre trois rues ) et qui unie et grisâtre avec les trois hautes marches de grès presque devant chaque porte semblait comme un défilé pratiqué à même la pierre par un *sculpteur* <tailleur d'image> qui aurait à même la pierre comme où il eût *taillé* <sculpté> une crèche ou un calvaire. Ma tante n'habitait plus effectivement que deux chambres contiguës restait l'après-midi dans l'une

このように 1910 年はじめ頃にはレオニー叔母の家および彼女の部屋は「サン＝テスプリ通り」あるいは「サン＝チレル通り」に面していた。作家はこの二つの通りの間で逡巡しているが、この段階では結局「サン＝テスプリ通り」に落ち着いたようだ。それを「サン＝ジャック通り」に変更したのは、上で引用したタイプ原稿 2 における加筆のときで、これはタイプ原稿における第 2 期の書き換えの時期、つまり 1911 年夏から 1912 年夏の間のことであると思われる。この時期の大きな変化の一つは「コンブレ I」と「コンブレ II」の区分が明確になったことである。「コンブレ」の草稿として重要なカイエ 8 (1909 年春から夏) の最初の断片においては、コンブレの外観の描写およびレオニー叔母の紹介の後に、「ビスコット」による無意識的記憶のエピソードが位置しており、「コンブレ」はまだ二分されてはいなかったが、同じカイエの第 2 の断片からタイプ原稿にかけて、部分的な記憶と、無意識的記憶による全体的な子供時代の想起の区分がなされるようになる<sup>13)</sup>。しかしながら、部分的記憶における幼少期の思い出はコンブレのことだけではなく、パリでの挿話も混在していた(幻灯のエピソード、およびスワンの訪問はパリでのこととされている。ただし就寝劇はコンブレでの出来事である)。タイプ原稿における第 2 期の書き換えによって、「パリ」という文字が消され、「I」という小見出しが書き込まれる。「II」という加筆は見られないが(この問題は後に再び採りあげる)、子供時代の思い出のほとんどすべてがコンブレに集約され、プチット・マドレーヌを中心に「コンブレ」が二部構成になったのである。「サン＝ジャック通り」の登場はこのような構成と関係があるのではないだろうか。

13) RTP, pp.702-704 参照。

### Ⅲ. プチット・マドレーヌと「サン＝ジャック通り」—記憶とトポス

マドレーヌ菓子は「サン＝ジャック貝（ホタテ貝）」を模したものであり、小説の中でも「サン＝ジャック貝の溝のついた貝殻」（«la valve rainurée d'une coquille de Saint-Jacques»）（RTP, I, p.44）でかたどられたように見えると書かれている。「サン＝ジャック通り」を「サン＝ジャック貝」の形をしたプチット・マドレーヌに関連づけることは容易であるように思えるが、結論を急がないでおこう。問題は、この両者に関連があるなら、その関連にどのような意味があるのかということである。カイエ 8 およびカイエ 25 の段階では、女中のフランソワーズが主人公にお茶を差し出し、彼はそれを「ビスコット」に浸す<sup>14)</sup>。断片的な草稿を集めた「プルースト 21」の中に保存されているこの挿話の草稿において、「ビスコット」は「プチット・マドレーヌ」に、フランソワーズが母親に変更される。「プチット・マドレーヌ」はその「むっちりとした«dodus»」形態が女性の肉体を思わせるほどにエロチスムを喚起する（«si grassement sensuel»）と同時に、「厳格で敬虔な皺«sous son plissage sévère et dévot»」によって、それとは相反する宗教性をも併せ持っている（RTP, I, p.46）。実際、「プルースト 21」の草稿においては、聖者ヤコブ（saint Jacques）にゆかりのあるスペインのサン＝ジャック・ド・コンポステル（サンチャゴ・デ・コンポステラ）への巡礼者に対する言及もある<sup>15)</sup>。ところで、「プルースト 21」のプチット・マドレーヌの草稿の冒頭に«Ⅱ»という表記が見られることは注目に値する。この草稿が書かれた時期、つまり 1909 年の晩秋の頃には既に、「コンブレ」を二部に分ける意図があったように思われるが、その際プチット・マドレーヌの挿話を«Ⅱ»の冒頭に置こうとしていたのであろう。タイプ原稿の第 2 期の書き込み段階で、「Ⅰ」という題は付けられたものの、「Ⅱ」という題が書き込まれていないのは、この要となるエピソードをどちらに入れるべきか作家は迷っていたのかも知れない。いずれにせよ、プチット・マドレーヌの挿話が「コンブレⅠ」と「コンブレⅡ」をつなぐものであることは間違いない。

ここで注目すべきことは、「コンブレⅠ」と「コンブレⅡ」の空間構造の相違である。「コンブレⅠ」において語られる追憶は、空間的にも時間的にも限定された「就寝劇」であるのに対して、「コンブレⅡ」では町とその周辺を含めた子供時代の思い出の全体が蘇るのであり、部分的記憶と全体的記憶という対立があることは確かであるが、そこにはトポス上のもう一つの対立が認められる。

Et dès que j'eus reconnu le goût du morceau de madeleine trempé dans le tilleul que me donnait ma tante [...], aussitôt la vieille maison grise sur la rue<sup>16)</sup>, où était sa chambre, vint comme un décor de théâtre s'appliquer au petit pavillon, donnant sur le jardin, qu'on avait construit pour mes parents sur ses derrières (ce pan tron-

14) RTP, pp.695-697 参照。

15) RTP, p.701 : «[...] , les formes — et celle aussi du coquillage, du pèlerin de Saint-Jacques, en sensuelle pâtisserie, sous son plissage sévère et dévot — s'était abolies.»

16) 下線は筆者による。



qué que seul j'avais revu jusque-là).

(RTP, I, p.47)

「就寝劇」の舞台となったのは、レオニー叔母の裏の庭に面して建てられた別棟なのであり、他方プチット・マドレーヌによって蘇るのは、叔母の部屋がある、街路に面した灰色の家である。つまり家の表と裏、あるいは街路と庭という空間的対立が見られるのだ。そしてその街路こそが、ここではまだ名に言及されていないが、「コンブレーⅡ」の冒頭で「サン＝ジャック通り」であることが明らかになる。「サン＝ジャック貝」の形態を持つマドレーヌ菓子が「サン＝ジャック通り」に面する叔母の家の表側を蘇らせるというように、架空の街路名は無償のものではなく、また実在の教会名に対する単なる暗示でもなく、この命名によって、記憶を喚起するものと喚起されたものとの間に詩的な呼応関係が生み出されることになったのである。

(大阪大学助教授)